

---

# 東方馬鹿者語

放浪 旅人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方馬鹿者語

### 【NZコード】

N9440Z

### 【作者名】

放浪 旅人

### 【あらすじ】

二十歳なのに見た目は可愛い系中学生レベル！  
頭は小学生以下！

そんな、少年？青年？の物語

## ネタバレあり主人公設定（前書き）

ハイ。タイトルどおりです。  
それでもかまわない方はどうぞ。

## ネタバレあり主人公設定

名前

氣樂天

読み

キガク  
テン

容姿

童謡で身長が低い

アリサの黒髪にたれ田。

女裝がよく似合ひ。

性格

二十歳なのに子供っぽい。

名前の通り気楽な楽天家。よく甘える。

二〇一

職業

旅人（無職？）

風雨同舟

あつちこつちを行つたり來たりしている。その為、顔は広い。

ただ、金はない。

能力

流れを操る程度の能力

なかなか応用の利く能力で使いやすい。

#### 使用例

妖怪に襲われた時に攻撃を受け流し、逃げ去る。

魔法の森のキノコ胞子を風の流れを操り、散らばせる。  
その他諸々

#### 説明

外来人なのか幻想郷の人なのかよく解らない。  
幻想郷ではかなり謎のある人物。（しかし、アホなので、あまり気にされない。）

その内バカルテット+1になるのではないかと噂。

ただ、アホなのだが、職業柄感覚は鋭い。

童顔、低身長はNGワード、口にするごとに、体育座りで泣き出す。

以前、紫の家に迷い込んだ時に女装させられ、それ以来紫と女装は苦手。  
しかし、藍に逃がしてもらい、藍に懐いた。  
橙ともその時仲良くなつた。

（精神年齢が同じ…？）

逃げ足はとてもなく速い（幻想郷、最速？）

天より一言

「こんな小説だけど宜しくお願ひします！

……アホ、アホ書いてあるけど、そこまでアホじゃないよ？

……え？  $2 + 4$  ?

……6?

……え！？違うの？

本当は8？ ありがとう。また一つ賢くなつたよ。

バイバイ！

## ネタバレあり主人公設定（後書き）

今後、設定と食い違う事がありましても、あまり気にしないで下さい。

作者はアホですから。

## 1・主人公はバカだった（前書き）

初の連載小説です。

短編の時よりひどいかもです。ハイ。

キャラ崩壊もあります。ハイ。

さらに、かなり短いです。ハイ

それでもよければどうぞ。

馴染な方はお手数ですが、ケータイの戻るボタンを押して下さい。

## 1・主人公はバカだった

「ここは魔法の森。

危なげなキノコが沢山生えており、そのキノコから幻覚作用のある胞子が舞っているとても危険な場所だ。しかし普通の人間は1分も保たないようなこの場所で人間が一人で食事をしていた。

「うーん、狼の肉は少し固いなあ。

たまには、美味しい物も食べたいし……」

胞子の事などお構いなしに、狼の肉に噛り付きながらうんうん、唸つていた。

彼の頭の中は美味しい食べ物の事でいっぱいだった。

……もう一度繰り返すが、「ここは魔法の森。

人食い妖怪や、幻覚作用のあるキノコ胞子が沢山ある。普通の人間にはとても危険な場所である。

食べ物の事など考える余裕がない場所である。

一時間程うんうん唸つていたが、いきなり立ち上がって呴いた。

「そうだ！人里に行つて団子屋に行こう！」

紹介が遅れたが、このアホそうな子は氣楽 天。

(キガク テン)

女装をして、12歳の少女です。と言えば通じてしまいそうだが、二十歳の男性である。

本人はコンプレックスらしいが、身長が低く、童顔なので仕方ない。

「？今、誰か僕のことを褒めたのかな？  
何か聞こえたけど……」

……気楽なアホである。

「まあ、いいや。

そんな事より、団子屋！団子屋！」

そんな事を叫びながら、彼は人里に向けて走りだした。

～～三十分後～～

彼は黒い玉から逃げていた。

「わは～ 待つのだ～。

私の獲物～」

中からは時折、天と同じアホっぽい声が聞こえていた。

「ヒイツ～ま、待てルーミア～！能力を解いて、僕を見て。  
どうやら、黒い玉の中に知り合いが居るらしく、必死に説得してい  
た。

彼はガ○ツの玉○が知り合いなのだろうか？

「あれ～？その声は天なのか～？」

そう言つて出てきたのは、○ンツの○男ではなく。

赤いリボンに綺麗な金髪をした、幼じよ……少女だった。

「全く、ルーミアも確認しなきや～。  
友達を食べるところだつたよ？」

「「めんなのだ～。  
でも、お腹すいたのだ～。」

「ふーん、でも人食いは駄目だよ。  
じゃー僕人里行くから」  
と言つて天が歩こうとすると……  
ガシッ！

ルーミアが腕を掴んでいた。

「あの～？」

ルーミアさん？ 僕、もう行きますよ～？」

「ゴハンちょっとだい！」

良い笑顔である。

「いや、だから僕は今から人里に「ゴハンちょっとだい！」  
変な会話である。

「よからうー僕のクイズに答える事が出来ればなー」  
「わは～。来いなのだ～。」

「行くぞ！ 4 × 6 は？」

「…………じ、10なのか～？」  
「フツフツフ、答えは！」  
「答えは？！」

嫌な予感がする……

「46だ！」

嫌な予感が的中してしまった。

「そ、そーなのかー！」「納得してしまった。

「そーなのだー！」「といつ訳でじやあね～」

「悔しいけど、バイバイなのだ～。」

……変な会話ではなく、アホな会話だった。  
こんなんで、大丈夫なのだろうか？

## 1・主人公はバカだった（後書き）

……短い。

しかも、いつもひどいのにおさらかもしけないです。ハイ。

## 2・人里でバッタリ（前書き）

やはり短いです。ハイ。

駄文ですが、どうか楽しんで下さい。

## 2・人里でバッタリ

「いや～、やつと着いたね～。

さて、団子屋 団子屋」

～少年？移動中～

「おや？慧音さんじやないですか！」

団子屋にいるなんて、珍しいですね～」

そこにいたのは、人里の守護者でありながら、寺子屋の教師でもある、上白沢慧音だった。

慧音は少し驚きながら応えた。

「ん？天か。お前の方こそ珍しいな。職に就かず、旅をしている奴が戻ってくるなんて。」

天は頭を搔きながら

「いや～、団子を無性に食べたくなっちゃいまして」と笑った。

「ほつ？団子を？」

しかし、慧音は一切笑わずに、言い放った。

「……だが、働いていないのに金はあるのか？」

天は笑顔のまま固まつた。そりや、そうだろう。

団子屋だつて商売なのだから当たり前だ。

「…………」

しかし、天はすっかり忘れていた。

今まで、狩りで食事をしていたので仕方ないが。

「はあ、働いてないから、無いよな？」

全く、いつか紅白の貧乏巫女のようにになってしまつた?」

「……」

まだ、固まっている。  
死んでるのではないだろうか?

団子が食べれなくて、ショック死なんて笑い話にもならない。  
……いや、幻想郷でならなつてしまいそうで怖い。

「慧音さん!」

突然、動いたので流石の慧音も驚いていた。

ナレーションである私も、主人公は死んだと思い、帰る支度をしていたので驚いた。

「な、何だ? いきなり。

少し驚いたぞ?」

そんな慧音の言葉も構わずに天は動き出した。

「 団子、奢つて下さいーお願いします!」

……土下座である。

日本古来より伝わる奥義を天は使つたのだ。

天は期待を込めてちらり、と慧音を見ると彼女は少し仰け反つていた。

刹那、有り難いお言葉と共に衝撃が天の頭を襲つた。

「だつたら……眞面目に働け!」

ガコン!..

「「」もつともです。

……ガクツ

結局奢つてもらい、天はいま団子を頬張つていた。代償は頭の割れるような痛みだが。

「いひやー、へいへはん。ふあん」、あひはどいぞまふ。

\* 通訳（いやー、慧音さん。

団子、ありがとうございます。）

「ひらひら、飲み込んでから喋れ。

全く、見た目同様子供っぽいな……」

慧音は言つてしまつた。

天へのNGワードを。

「…? ……」じくん。

天は団子を飲み込むと体育座りになつて、ぶつぶつ言い始めてしまつた。

「ひつく、どうせ僕は童顔だよ。うう。  
どうせ僕は中学生レベルだよ。ひつく。  
どうせ僕は……」

今にも泣きそうだ。

普通、二十歳の男が泣いたら。

あまり罪悪感はないが、天は中学生に見える。  
幾ら悪気はないとは言え、泣かせるのはマズい。

そして慧音が出した答えは一つ。

「わかつた！悪かつた！

団子をもつと食べて良いから泣かないでくれー！」

団子の追加だった。

寒くなつた自分の財布をみて、慧音は思つた。

……何故私は二十歳の男の子守りをしているのか？

やつ思ひと今度は慧音が悲しくなつた。

## 2・人里でバッタリ（後書き）

感想があればお願ひします。

批判でもいいので、感想が一つあるだけでも凄く嬉しいですから。

それではこのへんで……

### 3・人里の人形遣い

慧音の財布を壊滅状態にした天はとても一喜一悲しながら歩いていた。

どこに行くなんて決めていないが、とりあえず面白い事がないかな?と考えながら。

「む〜?何だろう?

あの、子供達の群れは?

面白そうだし、いってみよ!」

天が子供達の群れに突撃すると、そこでは人形劇をやっていた。

「わ〜!すごい、すごい!人形ができるみたい!」

……確かに人形劇も凄い。しかし、ナレーションの私は二十歳の男を子供達と見比べて、あまり変わらないという事実も凄いと思った。

（――一時間後――）

天は人形劇をやっていた人に、話し掛けていた。

「アリス、すごかつたね〜。

人形ができるみたいだったよ!」

「あら?天じゃない。

ありがとう、嬉しいわ。」

彼女の名前はアリス・マーガトロイド。

マーガリンと間違つてはいけないし、不思議の国にも住んでいない。

強いて言つなら魔法の森に住む、魔法使いである。

……友達は少ない……

「ナレーションは、私にケンカ売つてるの?」  
「いえいえ、そんな事はありませんよ?」

「～閑話休題～」

「そうだ！」

「ねえ、アリス。紅茶頂戴？喉渴いた！」

「何でこんな子供っぽくなつてしまつたんだろう……  
作者も頭を悩ませている。」

「はあ、仕方ないわね。」

「どうせ、言つても利かないだらうし。  
いいわよ、私の家にきなさい。」

「やつたね ありがと～。アリスの紅茶は美味しいんだ。」

「～少年？少女移動中～」

「いや～、しかしアリスも変だね～。」

「こんなキノコ胞子だらけの場所に住むなんて、普通の人間は耐えられないよ？」

「そんな、天の質問にツンとすましながらアリスは答えた。

「おあいにく様、私は魔法使い。  
こここの、瘴気が心地よいのよ。」

「ふうん。変なの。」

「まあいいや、早く入ろう?」

「他人の家の前に凄く、厚かましい。」

どこかのモダンな白黒魔法使いを越えるのではないだろ？

「あつ、勝手に入つたら危ないわよ。」

「えつ？」

ガチャ！

どうやら、少し遅かつたみたいだ。

瞬間、天の頬を何かがかすめる。剣だった。

「シャンハーハーイ！ シャンハーハーイ！」

そんな声？と共に剣の持ち主が姿を現した。

人形でした。

「し、上海？ 危ないから、その剣を降ろして？」

流石のお氣楽な天も、この時ばかりは顔面蒼白。

そんな天に上海は名残惜しそうに、剣を降ろした。

「……ねえ、上海？」

何で名残惜しそうなの？  
もしかして、僕の事嫌い？」

しかし、必死に上海は首を振りながら、否定した。

「シャンハーハーイ！ シャンハーハーイ！」

シャンハ、シャンハーハーイ！

……否定した？

「うんわかった。

これには深い理由があるんだね。  
何、言つてるか解らないけど。

その必死な仕草を見れば解るよ。」

「どうでもいいけど、早く紅茶を飲みましょ？」  
と、ほぼ空氣同然のアリスが口を開いた。

「うんわかった。」

そして、二人と一体は家中へと入つていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9440z/>

---

東方馬鹿者語

2011年12月31日20時50分発行